

落語家 三遊亭 鬼丸氏に聞く

聞き手 宮田 英里 ●フリーアナウンサー

落語家の名前の秘密

鬼丸がつけられるまで

宮田 鬼丸師匠は、平成九年に三代目三遊亭圓歌師匠入門。前座、内弟子修業を経て、平成二十二年に真打ちに昇進され、「三遊亭鬼丸」を襲名されました。

落語以外にも、ラジオのメインパーソナリティとして、FM NACK5（エフエムナックファイブ）で月曜日から木曜日までの帯番組「GOGGOMONZ」をもつなど、多方面に活躍されています。本日はそのラジオのレギュラー番組終了後、放送局のスタジオにお邪魔させていただきました。

まず最初に、師匠にお聞きしたいことがあります。「鬼丸」というお名前はいぶくんインパクトがありますが、お名前の由来について教えていただけますか。

鬼丸 珍しいでしょう。これにはわけがあるんです。落語家は、師匠の名前から一字をとってつけていただくのが普通です。私の師匠は三遊亭圓歌ですから、弟子の名前には「歌」がつく。実際、私も前座のと

きには「歌こ」、二つ目のときは「きん歌」でしたからね。ところが問題がありましてね、わが師匠の弟子は二十名以上いるんですよ。その一門全体が名前に「歌」をつけている。さらに、あの桂歌丸一門も「歌」をつけているものですから、いざ新しく名前をつけようとする、もうネタ切れ（笑）。考えつく名前はすでに誰かが名乗っちゃっているのです。

弟子の名前は、普通、師匠がつけるのですが、私の場合は「今回は、お前は自分で考えてい」と命じられました。そして、初めに考えたのが「歌丸」。歌丸師匠と間違ってお客さんが見に来るかもしれない。字面が似てるでしょう。師匠に提案すると、怒られましたね。

宮田 それは怒られますよね。

鬼丸 そこで、師匠が即席で考えてくれることになったんです。師匠は歴史好きでして、私が長野県上田市出身ということから、真田幸村にちなんで、「歌に、幸村の幸で、歌幸でどうだ」と。確かに字面はいい。字面はいいんだけど……。

宮田 少し響きがよくありませんね……。



三遊亭鬼丸氏(右)と宮田さん (2012年4月5日 エフエムナックファイブにて)

鬼丸 そうそう。「かこう」ですよ。「下降」を連想させるじゃないですか。せっかく真打ちに昇進して、これから上昇しなければならぬときに、下降はいかんだろうと思いついて、師匠にそう申し上げたんです。すると、師匠は「そうか、じゃあ引つくり返して、『幸歌』はどうだ」と、ふたたびひねり出してくれました。

宮田 「こうか」ですか。これもまた響きがよくありませんね……。

鬼丸 そうなんですよ。「降下」でしょう。さらに、勢いよく落ちていくイメージじゃないですか。恐る恐るそれを指摘すると、師匠がしだいに飽きてきましてね。やつぱり、お前が好きなものを考えろということになったんです。

宮田 振り出しに戻ってしまいましたね(笑)。

落語家の名前のデータ集から 埋もれた名前を発見

鬼丸 そうこうするうちに、小島豊美さんという「およげーたいやくくん」を手がけられたプロデューサーとお仕事を一緒に

する機会を得たんです。著名な落語研究家、小島貞二さんのご子息なのですが、ありがたいことに、この方からCD・ROM「古今東西話家紳士録」をいただきました。あらゆる落語家の名前が網羅的に紹介された、貴重なデータ集です。せっかくなので調べてみると、気になる名前がありました。それが鬼丸です。これは字面もいいし、おもしろいなと思いましたよ。

早速、師匠に、「鬼丸にしたい」と申し上げました。すると、「名前の由緒を調べろ」と命じられました。落語の世界では、ほかの一門の名前をつけるのはご法度。歴史をさかのぼって調べろというわけです。

そこで、安易と言われれば安易でしょうが、インターネットで調べてみると、初代の圓生が、その圓生を襲名する以前につけていた名前だと書いてある。それで師匠に「三遊亭の名前で間違いないようですよ。何しろ初代圓生がつけていたようですから」と話すと、師匠はそれならいいと納得

顔。それで、鬼丸と決定しました。あとで小島さんに改めて調べてもらったら、全く違っているようでしたけど(笑)。

宮田 インターネットに書かれていた情

報は間違っていたということですか。

鬼丸 正確には三遊亭圓生の師匠がつけていたようです。初代三笑亭可楽の弟子だとも伝えられています。が、「おにまる」と読むのか「きまる」と呼ぶのかすらも定かでない。いずれにしても、百八十年前の名跡復活ということは確実ですがね。

宮田 それにしても「鬼」という字を名前につけるのは、勇気があることではなかったですか。

鬼丸 百八十年間、この名前が受け継がれなかったのも、そこに理由があるのでしよう。しかし、僕自身は「鬼」に悪いイメージはないんですよ。むしろ、それをつけることの効果は大きいと思いました。

考えてもみてください。落語界では師匠の名前の一字をつけるのが慣習ですから、一門はだいたい似たような名前になってしまっています。地方に行っても、「ええとと、三遊亭歌何とかさん」ぐらいにしか記憶されない。しかし、鬼丸だったら、絶対覚えられるし、忘れられないでしょう。

宮田 確かに、一度聞いたら決して忘れ

ることができない名前ですね。

鬼丸 うちの両親は反対しましたね。「人を笑わせるのが仕事なのに、『鬼』なんてつく名前をつけるだなんて、何ごとか。そんな名前にするんだったら、もう応援しないぞ」とまで言われました。

ところがいざ襲名してみると、やはり私の選択は間違いでなかったことが証明されました。このラジオ番組が始まったのも、襲名から半年後でしたから。それまで何も実績がないのに、とんとん拍子で話がまとまりましたからね。

真打ち昇進後、ラジオに挑戦 放送の常識を知らずに苦勞

宮田 私も日頃ラジオの仕事に携わっているのですが、ラジオという世界へ新たに飛び込まれる際に、戸惑いなどはありましたか。

鬼丸 今はどタレントがいなかった時代、落語家はラジオから引つ張りだ。こだったんです。音だけで伝える世界ですから、落語とラジオには親和性があるんですね。

ただ、私の場合、放送というものを理解

していなかったもので、当初は困りましたよ。
宮田 どんなことに戸惑われたのでしょうか。

鬼丸 落語は高座の上で完結する世界です。あえてどぎつい表現をすることもありますが、しゃべったことは残らない。ですから、僕は普段、どこまで話してもかまわないという感覚でいるわけです。

宮田 お客さんは、お金を払って話を聞きに来られますから、もともと落語や落語家さんに興味をもっていられっしやるということですよ。

鬼丸 そうです。お客さんの顔を見ながら話をするので、今、目の前にいるお客さんは、好意をもっているかいないかがすぐわかります。好意をもっていないとわかれば、あえて表現を丸くしてお茶を濁すこともできるんです。しかし、ラジオの場合、聴取者の反応がタイムリーにはわからない。ある程度の時間が経過してから、メールやはがきで反応が返ってくる。これはもしかしたらの話ですけど、BPO（放送倫理・番組向上機構）を通じて抗議されることだつてありうる。

初めのうちは、その加減がつかめなくて四苦八苦しました。番組を指揮するディレクターに、「楽屋ではないんだから。何百万人が聞くことができるラジオで言うことではないでしょう」と指摘もされました。

不特定多数が耳にするラジオの場合、表現を間違えたりすると、心証を害する人も出てくる可能性もある。そうしたことまで考えながら、言葉を選んで話すことができるようにするまでには時間がかかりました。ただし、それさえクリアできれば問題はありません。何しろ私の場合、根っからのしゃべり好き。四、五時間延々と話しても疲れない。実は、就職活動のときにテレビ局のアナウンサーを受けたくらいですから。落語家もラジオのパーソナリティも天職みたいなものです。毎日、楽しくてしかたがありませんよ。

子ども時代の愛読書は落語集 図書室で落語の魅力を堪能

宮田 おしゃべりするのが大好きでいらつしやるとのこと。いつごろから落語に興味をもたれたのでしょうか。

鬼丸 落語との最初の出会いは、小学生のころでした。本を読むことが好きで、特に落語の本がお気に入りでした。小学校の図書室に落語の話が収録された本があったんですよ。それを読みながら、声を出して大笑いする、今から考えると不思議な小学生でした。

ただし、落語家になりたいとは思いませんでした。何しろ生で見たことがなかったので、落語家って、どういうものか想像できなかったんですよ。本気で職業にしようとは思えなかったものの、不思議と落語への関心が失われることはありませんでした。

初めて意識したのは大学入試のとき。親に「浪人は一浪までだ」と釘を刺されていきましたから、一浪して次も失敗したら、「落語家にならうかな」なんて思っていました。

宮田 「落語家にならう」というところは驚きです。

鬼丸 でも当時は、それが正直な気持ちだったんです。落語家という職業は、自分の中でそれほど優先順位は高くなかったん

ですよ。テレビで「八時だよ全員集合」や「オレたちひょうきん族」を見て育った僕らの世代には、笑いのセンスが違うんです。落語自体は、すごくウィットに富んだおもしろいものだと思っていました。落語家に関しては、必ずしも良いイメージをもっていなかった。

宮田 みごと東洋大学に合格され、四年間は大学生活を送ることになりましたが、次に落語家の道を探ろうと思われた時期が訪れたのはいつでしょうか。

鬼丸 僕らの世代は、ちょうど第二次ベビーブームの人たちが大学を卒業する時期とバブル景気のはじけて就職市場の超氷河期が重なって、とても就職には不利な時代でした。さつきも言ったように、テレビ局のアナウンサーなども受けたのですが、なかなか受からない。そこで、ここでも決まらなかつたら「落語家にならうかな」と思っていたところ、幸か不幸か、大手レストランチェーン店から内定が出たんです。

宮田 サラリーマンとしての生活がスタートしたのですか。

鬼丸 しかし残念ながら一年ももたなか



ったんです。入社してみると、働くのは大変なことだとあらためてわかったんです。

特に外食産業は、自分の時間を犠牲にして、ひたすら働かなければならない。若いから何とかやっていけるものの、体力が落ちる四十歳、五十歳になってもこの仕事はできるかなと考えると、不安を覚えたんですね。優秀な社員は、三十代で本社勤務に移るのですが、それはほんのひと握り。俺は無理だろうと考えて、冬のボーナスをいただいてからすぐに退社しました。

宮田 では、そこでいよいよ落語家への道を歩む人生のターニングポイントが訪れたのですね。

鬼丸 もはやこちらに選択権なんて存在しません。「落語家にもなるのかな」ではなく、「もう俺は落語家にしかれない」という切羽詰まった気持ちでした。さらに年齢は二十四歳。昔の芸人は、高校卒業後の十八歳で入門が一般的でしたから、焦りも感じましたよ。

落語の厳しさを実感

独演会の実施で、自らを追い込む

宮田 しかし、鬼丸師匠のお話を聞いていると、落語家としてやっていく自信みたいなものが、当初からあったのではないかと想像するのです。

鬼丸 落語家が演じる落語をほとんど聞かずに入門したわけですから、当時は自分の落語はうまいと勘違いしていたんです。しかし入門すると、先輩方の落語を聞く機会が山ほどあります。自分との歴然たる差を感じましたね。正直、今でも自分の落語を聞くのはいやですよ。自分の下手さ加減が明確にわかりますから。それであるとき奮起したんです。

宮田 何を始められたのですか。

鬼丸 年四回、独演会を開くということです。そこでは必ずネタ下ろしをして、自分のレパートリーを増やすんです。そうしなければ、どこへ行っても同じ話をしなければいけませんから、ふたたび招かれても二度と同じ場所には行けない。そこで、独演会で新しい話を自分のものにしていく。

完全に演じられるようになるためには時間がかかりますが、地道にやっていますよ。

新しい話を覚えると、芸が成長していきます。すると、思いもよらない効果が出たりするんです。芸の引き出しも増えるし、奥行きも出てくるんです。だから、独演会は絶対にやめないと心に決めています。

宮田 定期的に独演会を開催するとなると、練習や準備などで大変そうですね。

鬼丸 元来僕は、根がさばりやすい性格で、ぎりぎりにならないと何もやらないのでちょうどいいぐらいです。独演会をやめたら、新しい話を覚えようとしなくても自分でわかっている。あえて努力をしなればいけない状況を自らつくりだしているわけです。

宮田 それが、今の鬼丸師匠をつくった

要素の一つというわけですね。

鬼丸 ええ、そう思います。そして、今話したことで矛盾するかもしれないですが、もう一つ、成長を生んだ大事な要素があるんです。それは無理をしないということ。「自分は自分の実力以上のことはできない」と覚悟を決める。そうした意識でいると、どんな場所で演じてても、ほどよい緊張感があります。冷静さを失うことはありません。要は動じなくなるわけです。これができれば、お客さんの反応を見ながら、自分なりにベストを尽くせるようになるんです。こういう姿勢も、プロとしてやっていくには必要なことです。



宮田 英里さん

真打ち昇進はスタート地点

厳しい競争世界で戦う心構えとは

宮田 それは私たちの処世術としても大切なことのように思います。そうした経験や努力を積み重ね、二年前に真打ちになりました。

鬼丸 真打ちに昇進となると、世間的にはおめでたい話に聞こえるかもしれませんが、決してそうではありません。落語界は徹底した階層社会なのです。

一般的な話ですが、落語家になって、前座を三年から五年務めると二つ目になる。そして二つ目を十二年から十五年務めると真打ちになる。

前座では、入門して一年目よりも、四年目の人間のほうが仕事もできるし、高座にも上げれるから重宝される。

そうして二つ目になると、壁を感じるようになる。というのも、五年目の二つ目は、十五年目の二つ目と同じ土俵で勝負しなければいけないからです。それは十五年目のほうが仕事ができますよ。ですから、二つ目の最後のほうは仕事も多くもらえて、何

とか飯を食べるようになってくる。

しかし、真打ちになると、また元通り。十六年目の真打ちが戦う相手は、四十年、五十年の経験がある落語家たちです。彼らと戦っていかねばいけない。努力しなければ、下の世代にも追い抜かれます。

だからこそ、真打ち昇進はスタート地点だと意識して、もう一度走り出さなければいけない。前に山ほどいる落語家たちを追い越していかなければいけないのです。

宮田 そうした厳しい世界で仕事をされる中で、何か特別に心がけていらつしやることなどはありますか。

鬼丸 基本は神頼みです（笑）。

落語に限ったことではなく、仕事には自分の力の及ばないことであるでしょう。仕事が少ないにもかかわらず、その少ない仕事と同じ日に重なってしまう。そんな不運を経験すると、神社に行き、「仕事がかぶらないように」と手を合わせたりしたものです。

また、これは落語の世界には限りませんが、人間関係も大切です。人に恵まれないと、良い仕事は舞い込んできませんからね。

だからこそ、気をつけているのは人の悪口を言わない。やつかまない。そして、人の輪の中に入ること。

仕事が終わってそのまま家に帰ってしまふと、何も起こらないと先輩に教わって以来、何か出来事が起こりそうなところに、ふらっと立ち寄るようにしています。自分の出番がなくても寄席に行き、打ち上げに参加する。そして、お酒を飲みながら、先輩たちに質問をぶつけてみる。特に、売れている人のそばには積極的に行ったほうがいい。なぜ売れているのかを観察することで、自分の糧にもできますからね。

そして、もう一つ大事なことがあります。それは下の人間を大切にすること。たとえ現段階で自分の立場が上だとしても、この世界は誰もが可能性をもっている。立場が変わることなんていくらでもありますから、絶対にいじめてはいけません。いじめたらあとで仕返しされる可能性がありますから（笑）。まあ、それは冗談ですが、とにかくフラットな気持ちで相手と接する。これも大事な処世術ですよ。

宮田 落語など、芸事の世界では師匠と

の関係がとても大切だと思いますが、いかででしょうか。

鬼丸 師匠には、二言目には「頼んで弟子になつてもらったわけではない」と言われます。全くそのとおりで、私がお願いをして弟子にさせてもらっているわけです。考えてみれば、師匠は弟子をとる必要性はないんですよ。前座の時代は飯も食わせなければいけないし、お小遣いもあげなければいけない。芸も教えなければいけない。弟子は、負担以外の何者でもないんですよ。では、なぜ弟子をとっているのかというと、師匠も若いときには、そうしてもらったからにはかなりません。芸も教えてくれ、飯も食わせてくれたからこそ、今がある。だから、頼ってきた若者には、芸を教えて、飯も食わせる。これが芸事の世界の伝統です。

今、自分に弟子はいませんが、いつかもの好きな若者が弟子を願ひ出たら、そのときは、私が師匠にしてもらったことを、しっかりしてあげたい。それが自分を指導してくれた師匠に対する恩返しだと思っています。

大学で学んだことは、
社会に出てから必ず役に立つ

宮田 師弟関係というと、大学のゼミナールとも似ているかなという気がするのですが、大学時代に指導してくださった恩師にも同じような気持ちをおもちでいらっしやいますか。

鬼丸 東洋大学の経営学部経営学科で学んだのですが、マーケティングをテーマとした足田聰先生のゼミの講義はどういうわけか熱心に受けていましたね。

これが実際に社会に出てから役に立っていますよ。講義ではマーケティングには「ブライス」「ブレイス」「プロダクト」「プロモーション」だと教わったのですが、落語家になって自分という製品を売り出すために置き換えて考えてみると、確かにそのとおりでした。

自分の落語家としての価値は何か。若さや軽さ、そしてわかりやすさだろう。では、自分のプロダクトを自覚して、魅力を失わないようにするには、コテコテの古典落語の話し方をしない方がいい。ブレイスに

しても、落語家の多くが東京に拠点を定める中、僕はずっと南浦和に住んでいます。落語家が住んでいない土地柄ですから珍しがられて、地域のお祭りにも呼ばれるし、それをきっかけに埼玉県のテレビやラジオにも出演できるようになった。そしてこれらの要素を組み合わせてプロモーションにつなげていく。学問は必ず役に立つものだと実感しています。

豊かな人生を送るために

学生時代は多くの経験を積んでほしい

宮田 自分が学生だったころと今の学生さんを比べて、どのように思われますか。

鬼丸 今の学生はとにかくまじめですね。僕が大学生のときは、ひたすら麻雀や遊びに没頭していました。遊ぶにはお金がいりますから、そのためにアルバイトに明け暮れる毎日でした。しかし情けないことに、就職活動とかそういう大事なことに关してはのんびりしていましたね。

今の学生には、そういうがつつした感じが僕らの世代より少ないかもしれない。しかし、早い段階からキャリアを考えて

しつかりしているなと思います。

宮田 そんな現役学生たちにぜひアドバイスをお願いします。

鬼丸 学生時代に、多くの経験を積んでもらいたいです。最近の学生は海外旅行にも行きたがらないというじゃないですか。それはもったいない。学生時代はお金はなにかもしれないけど、時間はたっぷりある。親にお金を借りてでも、ぜひ海外へ行つて見聞を広めてもらいたいですね。

この年になると、無防備な旅は絶対にできません。海外旅行をする際には、身の安全を確保するために、ある程度しつかりした旅を計画してしまふ。しかし、若いと無茶できる。その無茶できることから得られることも多い。

そして、新しいことにも挑戦してもらいたいです。とはいえ、注意してもらいたいことがあります。それは、挑戦するといつても、いやなこと、向かないことは避けたほうがいいということです。モラトリウムの特権をよくかみしめてほしいんですよ。

私はたまたま楽しい仕事ができているのですが、世の中、やりたい仕事ができる人

はほんのひと握り。大変だけど、歯を食いしばって仕事をする場合がほとんどでしょう。社会人とはそういうものです。

大学を卒業すればいやでも働かなければいけないのだから、学生のうちは正直に生きたほうがいい。やりたくないアルバイトを無理して続ける必要ありません。学費や生活費を稼ぐためにアルバイトも必要かもしれないけど、学生のうちは「お金」のために働く必要はない。実際はそうだとしたても、意識の中では、将来楽しめる仕事を見つかるためのトレーニングだと思つたほうが気が楽です。いやいや働くよりも、気楽な発想で楽しく働くべきですし、その中で意外な自分の適性を見つけれられるかもしれませんよ。

宮田 今の話をはじめ、師匠がしてくださったお話は、人生の本質ともつながってくるように感じました。また、ご自身のご経験と落語で培われた独自の人生訓は、今の激動の時代を生きるうえで、とても大事なことだと思いました。寄席などにも、これまで以上に足を運んでみたいと思います。本日はありがとうございました。